

ヴァラナシにおける宗教都市の機能と信仰

宮崎 智 絵

1. はじめに

インドにおいてヒンドゥー教は80%以上の人々が信仰している主要な宗教である。しかし、ヒンドゥー教は非常に多様な側面をもった宗教であり、その実態は大変捉えにくい。さらにヒンドゥー教は、カースト制度など社会制度や日常生活にも深く根を下ろしており、より一層、複雑な宗教となっているのである。また、キリスト教やイスラム教のような統一の聖典や教義がないのもわかりにくい宗教という印象を強くしている要因であろう。

そこで、本稿ではヒンドゥー教の聖地としてヒンドゥー教の中心地の一つであるヴァラナシについて、宗教都市の機能と現地調査をもとにこの地域の信仰の実態について論じることにより、民衆によるヒンドゥー教の信仰の実態を明らかにしていきたい。

2. ヴァラナシの概要

ヴァラナシの人口は約110万人、ガンジス河沿いから半円状にひろがり、住宅や商店から成り立つ中心部と、周辺の農村地帯から構成されている。そして、南北約6キロにわたってガートが連なるが、その中心であるマニカルニカーガートは数千年の歴史があると伝えられている。地形は、ガンジス河が南東から流れ、ヴァラナシで北に向かって大きく蛇行している。

ヴァラナシの歴史は、古代アーリア王国に遡ることができる。そして、抗争、対立を経てマウリア朝、グプタ朝、ムスリム、イギリス植民地支配という歴史をたどる¹⁾。マウリヤ朝は仏教が盛んであったが、ヴァラナシではシヴァ教、ヤクシャ、ナーガ崇拝が行なわれていた。クシャーナ王朝のあとのパッラヴァ王朝では、王がシヴァ神の信仰者であった。シヴァ教が次第に浸透するにつれて、聖なる巡礼地としてのヴァラナシ、ガンジス河の神聖性の信仰が広まっていった²⁾。グプタ朝では、インドに八つのマハーリングアができ、ガンジス河で沐浴をし、リングアにお参りするようになった³⁾。

ところで、インドの宗教には、ヒンドゥー教、シク教、ジャイナ教、仏教などがあり、それぞれの宗教に関係する多くの聖地と巡礼路がある。山折哲雄氏は、ヴァラナシの聖地構造について、いくつもの宗教による形成過程から述べている。インドの巡礼路は、古典的な右まわり循環巡礼のパターンに沿って、それぞれの時代にヒンズー教の小規模の聖地が成立。その巡礼路と聖地をめぐる、シャカやマハーヴィラが歩き、その後、イスラム教が入ってきて、イスラムの聖地や巡礼路がその上にかぶさる。イギリスが入ってきて、キリスト教の教会がさらにそのルート上の聖地に沿って建設される。こうしてヒンズー教、イスラム教、キリスト教という三つの異質な文化圏をまきこんだ新しい巡礼路が歴史のなかで形成されていく。そういう重層的な巡礼地図を絵に描いたようにかたちづくっているのがヴァラナシであるという⁴⁾。

そして、ヴァラナシは、工業、商業も発達している大都市である。すぐ近くには仏教の聖地として知られるサールナトもあり、聖地への巡礼や観光などを目的として多くの人々が訪れるインド四大都市に次ぐ大都市である。また、音楽の都としても名高く、北インドの音楽の中心地の一つでもある。さらに、ヴァラナシの名称は、ヴァナラシ、ベナレス、サンスクリット語で「マハーシュマチャーナ」（大いなる火葬場）とも呼ばれ、古くはカーシーと呼ばれていた。これらの多くの名からも歴史のある都市であることがわかるだろう。

3. 聖地としてのヴァラナシ

ヴァラナシは、年間100万人を超す巡礼者が訪れる宗教都市である。聖地への巡礼は功德をつみ、罪を清めることになる。そして人生儀礼を行なう。また、神をおがみ、聖なる河で沐浴をし、施しをし、聖者の話をきき、バジャンを歌い、儀式に参加する⁵⁾。ヴァラナシは、このようなさまざまな宗教的行為を主体的に行なう宗教都市としての機能を備えた都市である。つまり、ヴァラナシでは、ダサシュワメードガートで沐浴をし、ケガレ、罪を清め、マニカルニカーガートで死者を火葬にするのである。

このようなヴァラナシは、四つの聖地に名を連ねている。輝ける十二シヴァ神象 (Dvādāśa joti linga) は、ソームナート、マッリカールジュン、ケーダールナート、ヴァラナシのヴィシュヴァナート (Viśvanāth)、バイディヤナート、ラーメーシュワルなどであり、七聖都 (sapta purī) は、ヴァラナシ、ハルドワール、アヨーディヤー、マトゥラー、ドゥワールカ、ウッジャイン、カーンチープラム。この七聖都は、ドゥワールカの海岸を除くと他は河岸に位置しており、そこに住む人、そこを訪れた人は必ず解脱することができるといわれている。三聖都は、三祖霊供養所 (tristhalī) で、そこで供養された祖霊は必ず解脱することができることとされる聖都で、ガヤー、プラヤーガ、ヴァラナシである。、五十一母神座所 (Ikkyāvan śakti pīth) は、ヴァラナシのヴィシャーラクシー (Viśālākṣī) 母神、ヴリンダーヴァンのウマー母神、カルカッタのカーリカー母神など51カ所。母神はシヴァ神の配偶神とされることがあるため、シヴァ神像と同じ聖地に存する例が見受けられる。そして、書物のうちヴァラナシを聖地としているのは、『マツヤ・プラーナ』『アグニ・プラーナ』『カリヤーナ』『クリティカルパタル』『アルベールーニー』『アブール・ファスル』である⁶⁾。そして、『スカンダ・プラーナ』第4巻の『カーシー・カンダ』では、この聖都にはヴィシュヴェーシュヴァラ神を中心にして同心円状の広がる7つの円環が、中心から8つの方向に引かれた線と交わる点56カ所にガネーシャ神が位置し、この都城を守っているとしている。この56カ所は、ガネーシャが方角神(デ

イクバーラ)あるいは門神(ドヴァーラバーラ)として魔法陣のように結界を形づくり、シヴァ神に敵対するものの侵入を阻んでいる。ドウンディラージャ(搜索の王)という名のガネーシャはそのいちばん内側の円環にあって、王にもたとえられるシヴァ神とその妃に近侍しているのである⁷⁾。シヴァ神の息子であるガネーシャが、シヴァ神信仰の中心地のひとつであるヴァラナシを堅固に護り、それゆえにヴァラナシは聖地であり続けているのである。

また、ヒンドゥー教の聖典のひとつに数えられている『マハーバーラタ』には、数ヶ所にヴァラナシが出てくる。ヴァラナシで雑貨屋を営んでいるトゥラーダーラが商人でありながら、永遠の不思議、倫理を知る者として登場する。また、インドラ神がマハーデーヴァ(シヴァ神)を一心に崇拜し、天界の統治権を獲得した地でもある。ジャイギーシャヴィヤは、ヴァラナシでマハーデーヴァに見いだされ、君主の八つの柱の特注を授けている。「バラモンに生まれ変わった王」では、カーシー王国の国王ディヴォーダーサはインドラ神の命によりヴァラナシの防備を強化している。このカーシー国は非常に栄え、第二のインドラ神の都とさえいわれたという。そして、非常に徳の高い聖仙サンヴァルタがいるところとして登場する。『マハーバーラタ』でのヴァラナシは、インドラ神の都でもあり、シヴァ神が姿をあらわす都でもあり、聖仙のいる都でもある。物語の中でも神々に関係する都としてまさに聖地としての宗教都市の機能を果たしているのである。

ところで、聖地の中でヴァラナシが特別とされるのは、ガンジスがヴァラナシの手前で大きく蛇行し、北の方向に一端方向を変えるからである。北の方向には、シヴァ神の住処であるヒマラヤのカイラス山があり、ガンジスはその中流域のヴァラナシに至り、シヴァ神から神聖で高貴なエネルギーをもらい、河の生命力を復活させ再生ことからヴァラナシが新たなる生命を授かる特別な場所とされてきた。さらに、ヴァラナシがどの聖地よりも重要視されるのは、シヴァ神に愛され護られているこの聖地で死ねば、そのまま解脱が得られるという信仰に支えられているからである。つまり、小石にいたるまで吉祥を授ける者(シャンカル、シヴァの別名)が宿る、といわれるように、シヴァの恩寵に包まれ、あらゆる罪障を浄め

てくれる女神ガンガーが、南北から約5キロにわたって流れている。焼かれた死体はガンジスの水に浸されて、死者の魂がそこで昇天する。魂をガンジス川の強力な浄化力で清めて、もっともすばらしい天上の世界に送り届ける⁸⁾。ガンジスの水信仰は、女神信仰、シヴァ信仰と結びついて生と死、再生を体験する河として聖地を形成しているのである。また、ヴァラナシは、シヴァ神が持つ三叉の戟の上にあるとされ、全世界が大洪水で水没してもヴァラナシだけは残ると信じられている。そして、シヴァ神のリングが最初に地球を貫いた場所なのである⁹⁾。

ところで、北インドでラーマ信仰を広めるのに貢献したトゥラシーダースは、『ラーマ・サタサイー』(1585年)で以下のように述べている。

84 (BI91) 寛容が聖地ヴァーラーナシーなのです。ここでの最高神への信愛は神々の河(ガンジス河)のようなもので、清浄なる知識は世界の主宰神シヴァのようなものです。これらは力(パールヴァティー女神)である慈悲とともに輝いております。

注釈者によれば、聖地ベナレス、ガンジス河、世界の主宰神シヴァ、パールヴァティー女神が一緒になって解脱をもたらすように、寛容、最高神への信愛、慈悲、知識も一緒になって解脱をもたらすのだとされている¹⁰⁾。最高神とはラーマのことであるが、ラーマを最高神とするトゥラシーダースさえも聖地としてのヴァラナシについてこのように記述している。シヴァ神だけではなく、河、女神、聖なる土地のいくつもの要素が重なることによって、どの聖地よりも解脱をもたらす聖地として認識されているのである。

さらに、ヴァラナシ全体で三千を超すといわれる寺院や祠は、共通する特徴やさまざまな目的によっていくつもの組み合わせをなし、それらを結ぶ巡礼路が重なりあって網の目のように複雑なネットワークを形づくっている¹¹⁾。巡礼の対象となる場所は、それが聖地として宗教の信奉者すなわち巡礼たちにとって、至高の聖的価値がなければならない¹²⁾。ヴァラナシにおいては、巡礼の始点であるヴィシュヴァナート寺院は、聖域構造の中心であり、至高の聖的価値のひとつである。

また、ヒンドゥー教の聖地の特徴は、聖人は存在するが、キリスト教やイスラーム

ム教のように教祖を有していないため、教祖に関連する聖地が存在しないことである。また、ヒンドゥー教の聖地は、『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』、プラーナなど物語、神話に関するものが多いということであろう。これらの物語、神話が日常的空間を聖地という非日常的空間へと転換させる機能を果たしている。そこでは、神話や物語が反復されると同時に新たに創造される。原体験のうえに追体験が重なり新体験が加えられる。語りや体験や儀礼のいくえもの反復と重層が練りあげられる。そして、そうした体験をとおして自己が組み替えられる。自己を支えてきた日常的な遠近法が揺らぎ、溶融し、おおいなる遠近法のもとに再統合される¹³⁾。このようにして聖地はさらに聖地として構築されていくのである。

そして、シヴァ神は、火葬場を家をしている。マニカルニカーガートはシヴァ神の住処であり、ダサシュワメードガートは、生と結びつくことによってシヴァ神と関連する場である。つまり、破壊者としての、あるいは生殖者として生と死の両方の機能をもつシヴァ神に対して、ヴァラナシは対応する機能をもった都市ということができる。

4. ヴァラナシの現地調査と信仰

本調査は、ダサシュワメード・ガートからゴウドリアまでの地域における信仰の実態について2003年に行なった(図1)。この地域は、パンチクローシー巡礼路、ナガラ・プラダクシナー巡礼路、アヴィムクタ巡礼路の内側にあたるヴァラナシの中でも特にヒンドゥー教の信仰の中心地であり、最も人が集まる地域でもある。つまり、ヒンドゥー教徒にとっては聖地であり、巡礼路でもある。巡礼には、日常世界からの分離、聖地での一時的な滞在という推移、そして再び日常世界への復帰という再統合という三段階をもつ¹⁴⁾。だが、その聖地に住む人々にとっては聖地であるとともに日常世界でもある。聖地を日常世界とする人々にとっては、巡礼路の寺院や祠ではなく、路地の祠や神像こそがもっとも身近な信仰の対象である。そこで祠などを調査することにより、この地域の民間信仰の特徴を明らかにしていきたい。

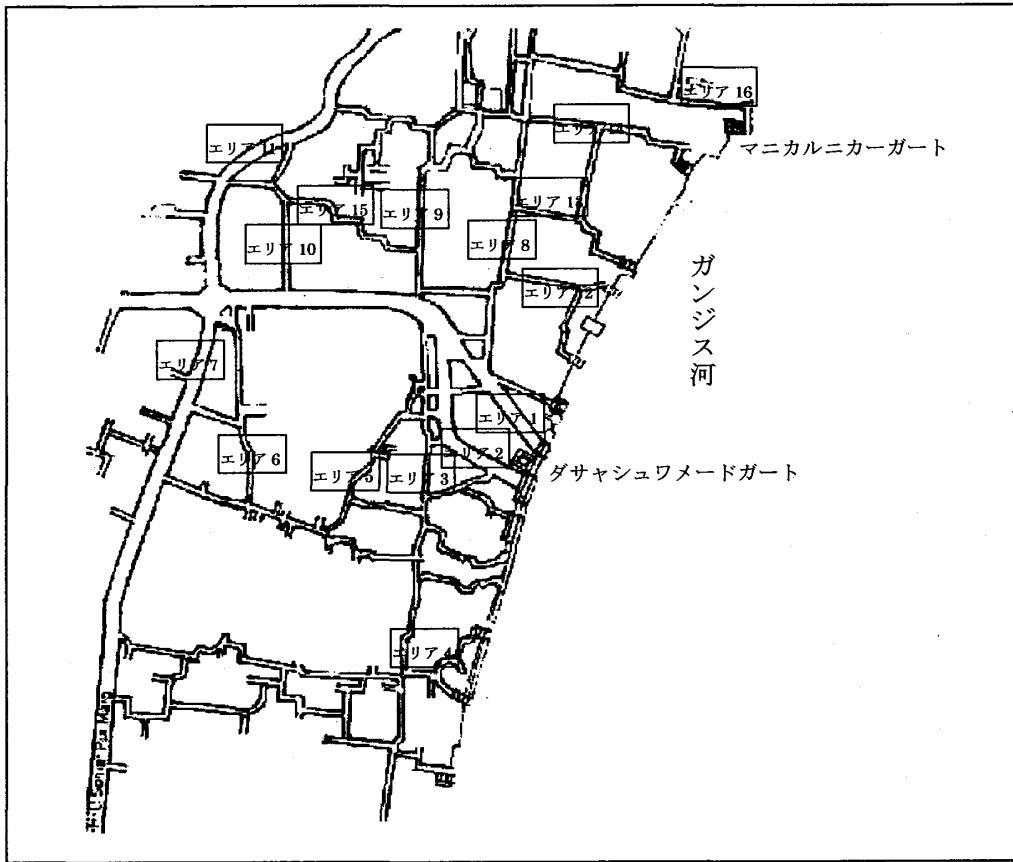


図1 ヴァラナシ調査対象地区

エリア1 (図2) には、①ハグワーン神 ②③⑦ハヌマーンが祀られている。③のハヌマーンは、オレンジ色に塗られており、両横にシヴァリングが2つずつ祀られている。その他には、④サドゥのリクリババは、横にガネーシャ、シヴァリング2つがあり、⑤カーリーは上にガネーシャの彫りものがある。⑥カーリーの前にシヴァリングがあり、横にハヌマーンと男女の像、後ろに木があり、地元の人によると1000年は生えているという。ここではヒンドゥー教の神と樹木信仰の二重構造の信仰がみられる。⑧はガンガーの母ココダイとガネーシャ、その前にシヴァリング (多頭の蛇あり) とナンディ牛 (前に亀がいる) があり、右奥にメリーテサン (サドゥ) が祀られている。ここは、2、3時間

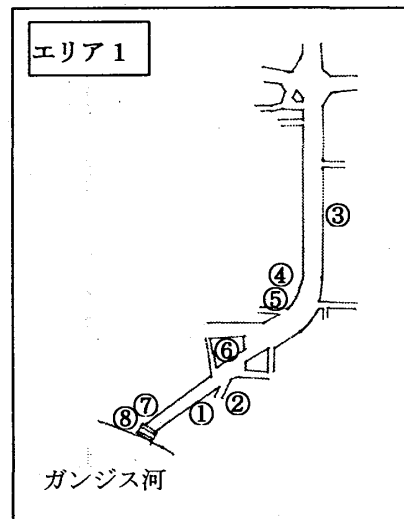


図2

があり、右奥にメリーテサン (サドゥ) が祀られている。ここは、2、3時間

お祈りをする所である。

エリア2 (図3) は、①ガンガー女神があり、前にリングとナンディいる。②カーリー、③ハヌマーン、④ハヌマーンの右にガネーシャと後ろにリング3つある。

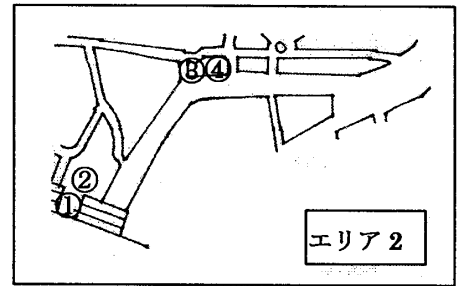


図3

エリア3 (図4) は、①シヴァリング、②ドゥルガーと前にシヴァリングがある。③は木のまわりにカーリーやリングなど多数祀られている (図5)。④木の前にハヌマーンの祠がある。⑤⑥は朱色に塗られているガネーシャで、⑥は右横にシヴァリングがあり、リングの上に鈴ある。

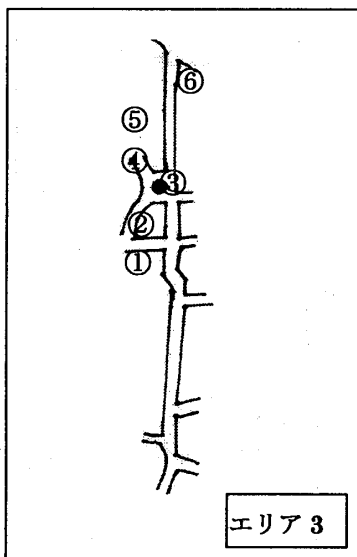


図4

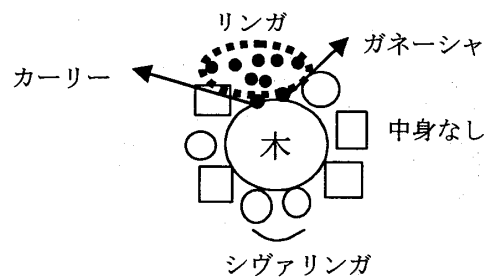


図5

エリア4 (図6) は、①シヴァ、パールヴァーティ、②③④⑤シヴァリングがあり、④大、小、計2つ、⑤大、中、小、計3つ、横に祠の中に中1つであった。⑥木の根元にナーガが祀られている。⑦リング4つ、ガネーシャ、ナンディ牛、シヴァ、⑧シヴァリング、ハヌマーン (朱色に塗られている)、⑨シヴァリングが2つずつ3つの祠があった。一番左は前にシヴァリ

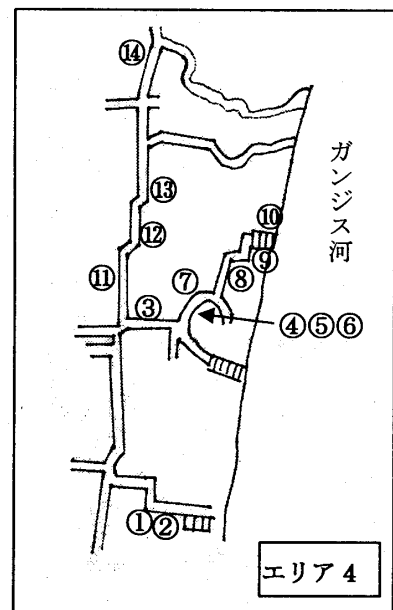


図6

ンガ、後ろにガネーシャ、ハヌマーンが祀られている。⑩シヴァリングアの祠が5つある。⑪シヴァリングアには、左にハヌマーン、後ろにガネーシャがいる。⑫ハヌマーン（朱色）、ガネーシャ（朱色）、シヴァリングア3つ、(図7) ⑬シヴァリングア、後ろにドゥルガー、カーリーの足が前にあった。⑭シヴァリングア。このエリアは、非常にシヴァリングアが集中した地域である。

エリア5 (図8) は、①②③④シヴァリングアがあり、①右にナンディ牛、後ろにハヌマーン(朱色)、③多頭の蛇あり、後ろに鏡、左に三叉鉾④ナンディ牛が右にいた。⑤ハヌマーンが8つあった。

エリア6 (図9) は、①ハヌマーンがあり、前にシヴァリングアがあった。②シヴァリングアが木の周りに7つ(中ぐらい)、木の下に小さな祠があった。

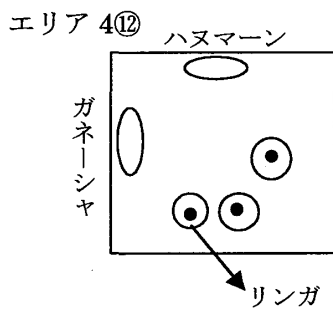


図7

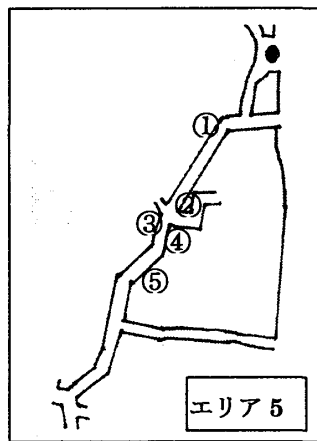


図8

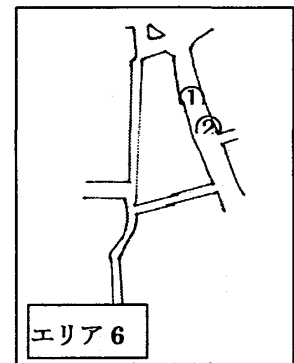


図9

エリア7 (図10) は、①木の横にハヌマーンの祠があり、前に2匹の蛇、少しはなれた横にナンディ牛、ナンディ牛の後ろに2匹の蛇がいた (図11)。

エリア8 (図12) は、①シヴァリングアが建物の中にあった。②ハヌマーンが朱色で花が飾ってあり、祈る人が多数いた。

エリア9 (図13) は、①中央に3人の神とカーリーが右の壁にあった。②朱色のハヌマーンが祀られている。

エリア10 (図14) は、①朱色のハヌマーンがと前にシヴァリングア、その上に鏡があった。②ナンディ牛、リングアが祠3つあった。2つの祠のナンディ牛は中を向い

ている。③朱色のハヌマーンが祀られている。

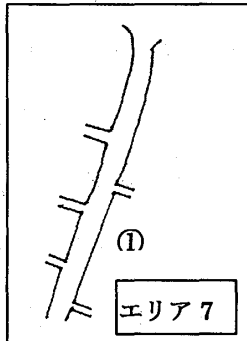


図10

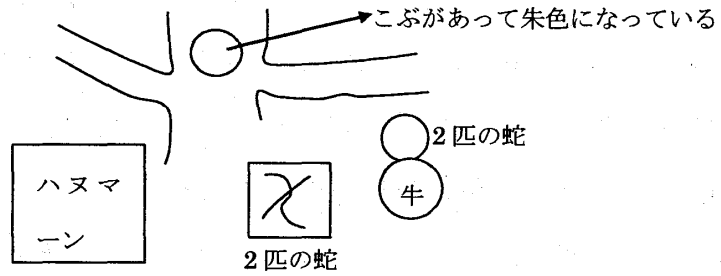


図11(エリア7①)

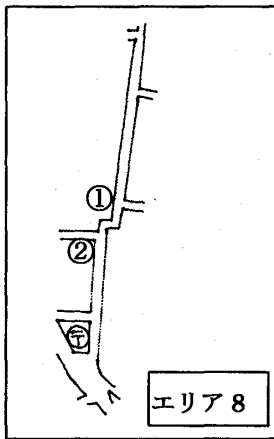


図12

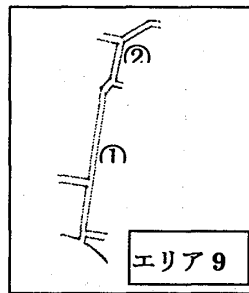


図13

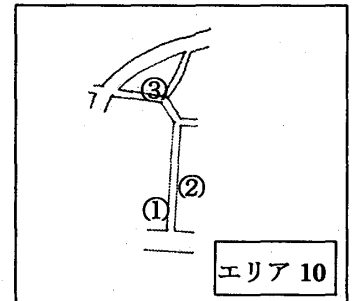


図14

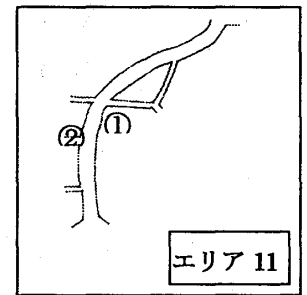


図15

エリア11 (図15) は、①ハヌマーンやガネーシャ、リングなど、②木の下に朱色のハヌマーンが祀られているが、木も朱色に塗られている。横の建物の中にシヴァリングがあった。

エリア12 (図16) は、①朱色のハヌマーン、前にシヴァリング、ナンディ牛が祀られている。②ハヌマーンは、大1つ、小3つ、③④⑤シヴァリングで、③祠2つ、奥の方は大きく、手前は小、上に水を入れた壺を吊り下げている。④祠に2つあった。⑥木の周りにヴィシュヌとラクシュミー、シヴァリング5つ、ガネーシャが祀られていた。⑦シヴァリングで祠が4つ、河側から2つ目の

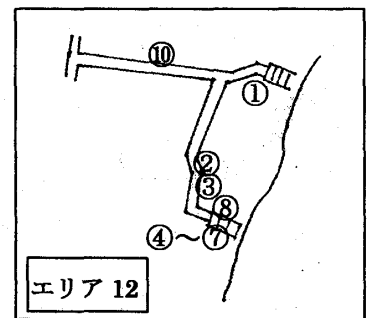


図16

祠にはリングが8つあった(大きいのが1つ、まわりに7つ)。⑧⑨⑩シヴァリングで、⑧大1つ、⑨ハヌマーン、ナンディ牛、⑩リング6つが祀られていた。

エリア13 (図17) は、①木の横に塔があり、②シヴァリングの祠3つ、ガネーシャの祠1つ、③シヴァリングが6つ (大1つ (上に壺あり)、中1つ、小4つ) あった。

エリア14 (図18) は、①サラスヴァティが祀られ、前方の上部に鐘があった。祈り終わると鳴らす。横の祠にリングがあった。②朱色のガネーシャと前にリング12、③ガネーシャは、後ろにシヴァリング、通路を隔てて横の祠にもガネーシャがあった。④シヴァリングの祠が5つで、リングは各々3つずつあった。

エリア15 (図19) は、①朱色のハヌマーン、②銀色 (または金色) のドゥルガーと横の祠にシヴァ、③ハヌマーン、④ナンディ牛のまわりにリングが10 (うち1つは白色) あった。

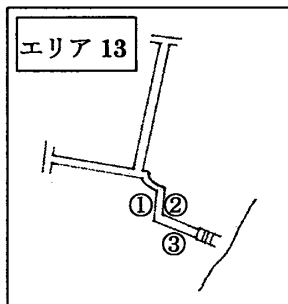


図 17

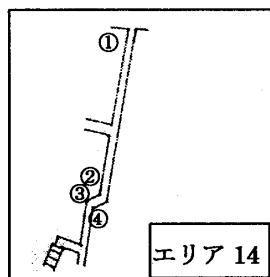


図 18

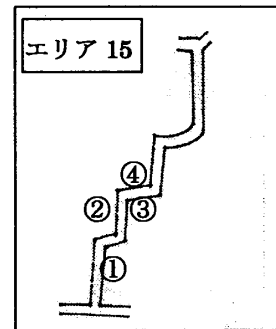


図 19

エリア16 (図20) は、①~⑤、⑦⑧⑫⑭⑰シヴァリングである。②小さな寺院のよう(大きな祠ともいえる)であり、多頭の蛇、上に壺が吊り下がっていた。③大きな祠が2つ。ナンディ牛あり、さらに横にガネーシャの祠があった。朱色で、皿に油を入れて火を灯していた。④建物の下に小さめのものがひとつ、⑤シヴァリングとナンディ牛があり、牛の方が大きい。⑦小さな祠で、横の建物の下部分にシヴァリングがあった。⑧シヴァリング5つとガネーシャ、⑫シヴァリング4つ、

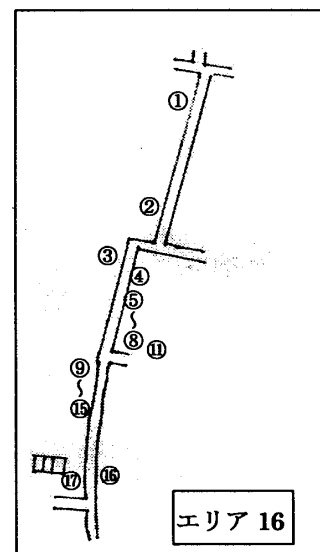


図 20

⑦祠に小さめのシヴァリング2つ、横にガネーシャとハヌマーンの祠があった。⑧下に人を踏んでいるカーリー、⑨ハヌマーン、カーリー、シヴァ神、ガネーシャ、⑩リング（単に棒状の石）、シヴァとパールヴァーティ、⑪ガネーシャ、⑬3人の神、⑮シヴァ神（上に鐘あり）、ナンディ牛があり、寺院のように大きい。⑯ナンディ牛が祀られていた。

以上のことから、ダサシュワメードガートを中心としたヴァラナシの信仰は、シヴァリングが圧倒的に強いのがわかる。シヴァリングが173以上であるのに対し、次に多いハヌマーンは36、ガネーシャは21である。また、シヴァ神は5つであり、この地域ではシヴァ信仰のうちでもリング信仰が特に強く出ている。

ところで、シヴァ神のリング信仰に関する神話では、賢者ブリグは、三神のなかでだれが最も偉大であるかを験すために、他の神々によって派遣された。シヴァのところへ着くと、神は彼を歓迎しなかった。神は妻と睦んでいる最中で妨害されなくなかったのである。賢者に当然払うべき敬意を欠いたということで、ブリグは、シヴァが男根像として崇拜されるという呪いをかけた¹⁵⁾。もともと賢者の呪いからリング信仰が発生したという神話は、呪いさえもシヴァ神は崇拜へと結び付けて、象徴としてしまう神であることを示唆している。つまり、リングとは生命力、創造力の具現化であり、シヴァの生類の創造神としての役割を表すもの、シヴァの苦行による熱力が体内に蓄積貯蔵されて強力な生産力である。さらにリングは、人間とシヴァを媒介、あるいは結びつけるものとしての役割をもっている。人はシヴァの出現、助力、恩恵を授かるうとしてリングを崇拜する。その願い、信仰が純粹であり、誠意のあるものであるのならばシヴァは出現して恩恵を授けているのである。しかしながら、リング信仰は、ヒンドゥー教からではなく古くはインダス文明にもその痕跡を見出すことができ、インド土着の信仰であると考えられる。シヴァ神とリング信仰が結びついたのは『マハーバーラタ』の書かれた叙事詩時代である。ヴェーダ時代はさほど重要な神ではなかったルドラ神がシヴァ神へと変容する過程で、シヴァの神格化の背景に生類の創造神としての役割を担い、この神格が生殖崇拜と結びついていったと思われる。『リング・プラーナ』や『シヴァ・プラーナ』

などでは、シヴァ神がリングから姿を現わす神話が語られている。

ヴィシュヌとブラフマーは、宇宙の創造者はどちらであるか喧嘩を始めた。すると突然、彼らの前に火炎を放つ宇宙の閃光に似た巨大なリングが生じた。二人は巨大なリングの頂と底を見るため、空中と水底に向かった。しかし、リングがあまりにも巨大であるため無駄に終わった。ヴィシュヌとブラフマーは自分たちより偉大な存在者に気づき、大火炎に近づき、讃歌を唱え始めた。その讃歌に満足し、千手千足、三眼を有するシヴァが火炎を放つ巨大なリングから現れた。このシヴァはピナーカ (Pinaka) と呼ばれる弓を担い、身には象の皮をまとい、三叉戟を持ち、ナーガ (Naga 蛇) でできた聖紐をつけ、雷鳴に似た声で、昔は三位一体であったが、今はブラフマー、ヴィシュヌ、マヘーシュヴァラ (シヴァ) の三神に分けられている。ブラフマーは未来のヴィシュヌに、私はカルパの発生時にヴィシュヌの怒った額から生まれるであろうと告げた。告げ終わるとシヴァは姿を消した。この時以来、リングは広く人々に崇拜されるようになったという¹⁶⁾。

この神話は、三大神のうち誰が最も偉大であるかを語ると同時にリング形態による信仰が多様なシヴァ信仰形態の中でもブラフマーやヴィシュヌに対する優位性を強調するものであることを示している。さらに、創造主ブラフマー、維持者ヴィシュヌ、破壊者シヴァの三神一体を包含し、具現化した。リングから発出し、彼らはその中に永遠に住まい、彼らはその部分であり、構成要素であった。このように、シヴァはリングの中で増大し、高められ、一切を包含する基礎的な要素として現われている。破壊者の役割は、三つの原理的な顕現の一つに過ぎない。ブラフマーとヴィシュヌはシヴァの中に共存する¹⁷⁾。

しかも、シヴァリングは単体ではなく、複数あるいはガネーシャなどとの組み合わせが多い。ガネーシャ、カーリー、ドゥルガー、ナンディはシヴァ関係の神である。そして、大きな木のまわりにシヴァリングなど祀っているが、樹木崇拜は仏教以前から行われていた。木は力を表わしており、古代人の宗教意識では木は宇宙全体である。つまり、木は世界を象徴、要約しているのである。牝牛が角につけてい

た貝は、生誕と再生のシンボリズムを表すもので、護符にもなる¹⁸⁾。さらにインドにおける樹木に関する信仰は、木の霊力の恐れや、部族などの先祖崇拝に関係するものから考えられている。ヴェーダ時代には、ソマ樹が神の宿るところとされたばかりではなく、樹木そのものも神として信仰された¹⁹⁾。今日では、パイパル、バンヤン、トルシイ、ニームなどそれぞれの木に対する信仰があり、樹木崇拝は、ヴェーダ時代よりも多様化した信仰形態として民衆の信仰対象となっている。そして、樹木崇拝は、ヒンドゥー教の神との関連も見られる。パイパルの木はブラフマー神の住処と信じられているが、シヴァ神とヴィシュヌ神のも住むと考えている。また、木自身も幸福な結婚、男子を欲する女性、地鎮祭、聖なる紐の儀式、死者の魂を安らげるものとして崇拝されている²⁰⁾。トルシイの木は、ヴィシュヌ神を表す木として祀られている。寺院へ行って礼拝することができない女性は、毎朝木のまわりに牝牛の糞と水を注いで清め、夜は近くに灯明を点じて、この木をおがむ。ベルの木は、シヴァ神の木であり、シヴァ神は「ベルの木の柄を持つもの」というビルヴァダダといわれる。葉は儀式に用いるが、葉をリングの上におき、神が暑くならないように、涼しさと快適さを保つ²¹⁾。このようにインドでの樹木は、樹木そのものの信仰と同時に神の住処として、あるいは神自身として樹木崇拝とヒンドゥー教が重層構造をなしている。

また、ガート周辺では、エリア1-⑧（ココダイ、ガネーシャ、リング、ナンディ）、エリア2-①②（女神、リング、ナンディ、カーリー）、エリア4-⑨⑩（リング）、エリア12-①~⑧（ハヌマーン、リング、ラクシュミー）のように、シヴァ神信仰が多い。ガンジス河をガンガー女神というよりもシヴァ神と結びつけて信仰する形態が強いといえる。ガンガが地上に流れるときにシヴァが受け止めた神話は、ガンガ信仰とシヴァ信仰の重層的なつながりの神話であり、ヴァラナシはこの重層的な信仰を体現した聖地といえる。

5. 結 語

ヴァラナシは、ヴィシュヴァナート寺院を中心としたシヴァ神信仰による生と死、マニカルニカーガートを中心とした死、ダサシュワメードガートを中心とした生を象徴する重層構造をなす宗教都市としての機能をもつ都市である。また、パンチクローシー巡礼路とナガラ・プラダクシナー巡礼路、アヴィムクタ巡礼路という三重の巡礼路による聖域とが重なった多重構造の宗教都市でもある。さらに、日常生活の場として俗なる空間でもある。巡礼路がこの聖と俗の空間的・物理的な境界となっている。しかしながら、巡礼路内にも聖と俗は混在しており、巡礼者にとっての聖地と居住者にとっての日常とが共存している。

さらに、ヴァラナシは、シヴァ神の座所であるヒマラヤ=天界への門でもある。ヒマラヤ山とヴァラナシのシヴァ神と河口のカーリー女神は、山と海、高地と低地、天空と大地という象徴的対極に位置しながらも相補的に緊密に結びついている²²⁾。

鎌田氏によると、聖地が聖地であるゆえんは、そこに聖なるものが示現し、その力が宿り刻印されていると信じられているがゆえだろう、としている。そして、聖なるものは、ときには、神や霊や仏菩薩であったり、天体や動物や植物や鉱物や湯水であったり、気やエネルギーや波動であったりする。そのいずれにせよ、そこで人は聖なるものの実在に触れ、その臨在をとおして身心の変容を体験してきた。聖地はそうした聖なるものとの交わりの体験と身心の変容の情報と記憶がコンデンスされた場所なのである²³⁾。

調査地区は、聖地ヴァラナシの中心地であり、ガネーシャなど多くの神々が祀られている中でリング信仰の集中する地区である。つまり、シヴァ信仰が強いヴァラナシにあって、シヴァ信仰の中心であるということが出来る。しかし、シヴァ神のみの崇拝ではなく、ガネーシャ、ナンディなどシヴァ神に関係する神々の崇拝も盛んである。また、シヴァ信仰の形態は、リング信仰が中心であり、シヴァ神像での信仰はこの地域ではほとんど見られなかった。この地域でもシヴァ神のポストカードやポスター、ペンダントは売られているが、路地の祠などでは神像の形態は

少なかった。また、この地区での信仰形態は、シヴァだけではなく、ガネーシャやハヌマーンなどを同じところで祀る事例が多く見受けられた。つまり、一人の神のみへの信仰ではなく、多神教として複数の神への祈りが日常的に、そして違和感なく行なわれているという信仰の実態があらわれている。かつて、ヒンドゥー教をマックス・ミュラーが定義したような意味での一神教は、この地域では当てはまらない。多くのシヴァリングなどにより聖地を聖地たらしめ、また聖地ゆえに多くの神像などがあるのである。そして、聖なる空間は、また癒しの空間としても機能する。ガンジス河での沐浴によるケガレや罪の清めは、救済宗教としてのヒンドゥー教の象徴的宗教行為であると同時に、神への祈りを通じた癒しとして意味づけることができる。

シヴァ神とガンジス河の信仰の中心というヒンドゥー教の聖地という地位によって、ヴァラナシは宗教都市としての機能を確立し、それによって発展してきたのである。神話による聖地の地位の確保、あるいは神話に裏づけされた聖地としてヴァラナシは不動的な地位を築いてきたのである。さらに、宗教だけではなく、デリー、コルカタ、ネパールの行く交通の要所という地理的条件も重要な要素であり、商業の発展も宗教都市ヴァラナシとしての地位を確立するのに必要不可欠な要素であった。

参考文献

- 1) Diana L. Eck "BANARAS - CITY OF LIGHT" Penguin Books India, 1993, p43
- 2) 斎藤昭俊『インド聖地考』国書刊行会, 1985年, p128
- 3) 同上書, p128
- 4) 山折哲雄, 村山二郎, 大澤真幸, 青木保, 井本英一, 赤坂憲雄, 村井康彦, 篠田雄次郎, 西山克, 木間瀬精三, 鎌田茂雄, 田中優子『巡礼の構図』NTT出版, 1991年, p55
- 5) 2) 前掲書, p106
- 6) 2) 前掲書, pp16, p38, p40, pp103-105
- 7) 宮本久義『ヒンドゥー聖地 思索の旅』山川出版, 2003, pp157-158
- 8) 4) 前掲書, p56
- 9) 1) 前掲書, p94
- 10) R.G. バンダルカル著, 島岩・池田健太郎訳『ヒンドゥー教』ヴィシュヌとシヴァの信仰, せりか書房, 1984年, pp216-217
- 11) 7) 前掲書, p152
- 12) 聖心女子大学キリスト教文化研究所編『巡礼と文明』春秋社, 1987年, p13
- 13) 鎌田東二『聖地への旅』青弓社, 1999年, p131
- 14) 12) 前掲書, p6

- 15) Veronica Ions 1983 "Indian Mythology" 素酒井傳六訳『インド神話』青土社, 1990年, p110, なお三神とはシヴァ神、ヴィシュヌ神、ブラフマー神のことをいう
- 16) 立川武蔵, 石黒敦, 菱田邦男, 島岩『ヒンドウの神々』せりか書房, 1990年, pp80-82
- 17) Heinrich Zimmer, 1946 "Myths and Symbols in Indian Art and Civilization" Harper&Row / 宮元啓一訳『インド・アート』せりか書房, 1988年, p174
- 18) ミルチャ・エリアーデ著, 前田耕作訳『イメージとシンボル』せりか書房, 1972年, p175
- 19) 斎藤昭俊『インドの民俗宗教』吉川弘文館, 1991年, p57
- 20) 同上書, p60
- 21) 同上書, p77
- 22) 13) 前掲書, p151-152
- 23) 13) 前掲書, p131